バカとテストと召喚獣 ～蒼い瞳の従姉～

GAU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　～蒼い瞳の従姉～

【Ｎコード】
Ｎ７５５７Ｘ

【作者名】
ＧＡＵ

【あらすじ】
明久と同じ日同じ時間同じ病院で生まれたイタリア人ハーフの少女、夏目綾香は、その自由奔放且つ傍若無人な性格で彼を振り回す！
双子同然に育った彼と彼女のドタバタコメディー♪
この作品はバカとテストと召喚獣二次創作です♪

ぷろろーぐ☆（前書き）

気が付いたら書いてました。
読んでくれる方が楽しんでくれたら幸いです♪

ぷろろーぐ☆

とある家族向けマンションの一室。
春の陽気にあてられ、その少年は惰眠をむさぼる。
しかし、ベッドの上の盛り上がりは、一人分にしては大きい。
「んん……」
窓から差し込む日差しに、少年が寝返りを打つ。
その鼻腔を、柔らかい匂いがついた。
「ん？　んんん？」
眉根を寄せた少年が身じろぎしようとすると、全身が柔らかい何かで締め付けられる。
「んん？　な、なに……」
軽く寝ぼけたまま眼を開いていくと、視界いっぱいに金色が広がる。
ぼんやりしながら“それ”へと手を伸ばし、軽く撫でる。
柔らかい金色の手触りは気持ちよく、なんとはなしに撫で続ける。
「ん、うぅん……」
不意に気持ち良さげな声が聞こえた。つづけて体にまとわりついた柔らかいものがもどかしそうにうごめく。
そして、金糸の向こうに白い肌が見え、閉じられた眼の長いまつげが揺れた。
「……」
その“顔”を見た瞬間、少年吉井明久の霞がかかった頭がクリアーになっていく。
すると、自分のみぞおちのあたりにに二つの柔らかい膨らみを感じとり、意識は一気に覚醒した。
「……！！」
状況を瞬時に把握したところで、金糸の向こうの瞼が開き、蒼い

瞳が表れる。
「……」
「……」
数瞬、見つめ合う二人。そして、蒼い瞳の少女が天使のように、ふんわりと笑った。
「おはよ☆　アッキー♪」
その笑顔に朱を散らす明久。
それを見た瞬間、天使の微笑みが、悪魔の笑いに変化した。
「なーに？　アッキー。おねーさんに欲情した？」
「……おねーさんもなにも同い年だよね綾香と僕は」
少女、夏目綾香の嫌らしい笑みを見てゲンナリとなる明久。
「そもそも何で綾香が僕のベッドに……」
「あー、抱き枕〈明久〉が気持ちよさげだったから、つい☆」
「なんだか別のもののルビに僕の名前が使われた気がするんだけど？」
悪びれることもなくのたまう綾香に、明久がジト目になる。
「またまたそんなこと言って、おねーさんのおっぱいの感触楽しんでるくせに☆」
「……否定はしない」
吉井明久と夏目綾香は従姉同士だ。
同じ日同じ病院で同じ時間に生まれた二人は、双子のごとく時間を共有して育った。
ゆえにお互いのことはたいてい解ってしまう。
下手に誤魔化そうものなら、綾香はアダルトコードぎりぎりのボディタッチを駆使して明久に吐かせようとするだろう。
そして、このイタリア人ハーフの娘は、明久の反応を見て喜ぶのだ。
故に、素直に吐いた方が実害は少ない。
「ちぇー、つまんねーのー」
言いながら身を起こし、ベッドから降りる綾香。

そのまま軽く伸びをしてからあくびを一つ。
その様子を見て嘆息した明久は身を起こし、ハッとして綾香の姿を見た。
いまの綾香は、私立文月学園女子の制服に身を包み、肩をグリグリ回している。たわわに実ったソレのおかげで肩こりがヒドいという話を聞いた気がしたが、今はそんなことはどうでもよかった。
急いで首を巡らし時計を見やる。
「……」
「ん？　アッキー、どしたん？」
時計の短針長針の行方に唖然呆然となる明久。
その様子に綾香が首を傾げる。
「ち……」
「ち？」
「ちこくだーっ！？」
「あ、ほんとだ」
焦った様子の明久にのんびり同意する綾香だった。

ぷろろーぐ☆（後書き）

いかがでしたか？
まあ、続きを書くかは反響次第かな？
突発ネタですし。

それでは失礼します♪

だい☆いちもん♪（前書き）

なにやら思っていたよりずいぶんと反響がありましたので、続きを書いてみましたよ？

読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

だい☆いちもん♪

校舎へと続く坂道。
両脇を桜で彩られたその道に、鮮やかな金色が踊る。
「疲れた～、アッキーおんぶ～」
「もう、しっかり走ってよ綾香」
少しネジの緩そうな少年に手を引かれ、金髪の少女がぶーたれる。
「だいたいバイク通学ダメなのが問題なんだよ～。二ケツすれば遅刻なんてしなかったのに～」
ぶつぶつ文句を言いながらも手を引く少年にならって走る。
おかげで癖っ毛の長くて柔らかそうな金髪と、文月学園指定のブレザーを内側から盛り上げるふくらみと、腰回りを覆うスカートが上下に揺れていた。
「どっちにしたって僕を抱き枕にして寝ちゃった時点でアウトだったと思うよ」
苦笑いする少年、吉井明久にうながされ、仕方無しに足を早める少女、夏目綾香。
唇をとんがらかせながら明久の後頭部をにらみつける。
「むー、アッキーのくせに生意気な……とうっ☆」
っと楽しげなかけ声が響いて明久の背中に衝撃が走り、少女の柔らかい体がぶつかってきた。
「わわっ？！」
思わぬ衝撃に驚いて声を上げるも彼女の体をしっかと支えてみせる明久。彼の背中に笑顔でおぶさった綾香は身を起こしてご満悦だ。
「らっくち～ん☆　いっけー明久号～☆♪」
元気良く右手を突き出した彼女に対し、深々とため息を付いた明久は、彼女を支え直してから軽く走り出した。
どちらかといえば細身な明久だが、その体はきっちり鍛え上げら

れていた。
幼い頃から綾香と一緒に、サバイバル訓練が趣味だという彼女の父親の訓練に付き合わされた結果だ。
綾香はそんな明久の首に手を回し、彼の背中に体を預ける。
彼が坂道を上りきるまでの、わずかな間、綾香は桜を楽しむ。
明久が、足取りも息づかいも乱れぬまま坂を上りきると、そこには浅黒い肌の巌のごとき漢が仁王立ちしていた。
「遅刻だ。吉井に夏目」
「あ、鉄じ……じゃなくて、西村先生。お早うございます」
「あー♪　てっちゃんだー♪　おっはよ～ん☆」
明久は軽く会釈し、綾香は明久におぶさったまま身体を目一杯伸ばしながら右手を大きく振った。
その様子にため息をつく西村教諭。
「はあ、おまえ達は……普通に『お早うございます』じゃないだろう。それから夏目。おまえは教師に対してフレンドリー過ぎだ」
「はあ、じゃあ……今日も肌が黒いですね？」
「だねー♪　今日もいい感じに暑苦しいぞ☆」
明久が首を傾げながら言う真上で、綾香が片目をつむってペロリと舌を出しながらサムズアップする。
「お前ら……遅刻の謝罪より俺の肌の色や暑苦しさ……の方が重要なのか？」
「あ！　そっちでしたか。すいません」
「あたし的には重要かな～☆？」
謝る明久に、楽しげな綾香を見て嘆息する西村教諭。
「とにかく受け取れ」
そう言って差し出してきたのは二枚の封筒。
それを綾香が受け取り、明久の背から飛び降りると、自分のものと一緒に彼宛の封筒もさっさと破り開ける。
「って？！　ちょ！？　ま？！」
流れるような彼女の行動に、焦る明久。

「アッキーのクラスはっと……へぇ……ほぉ……ふぅ～ん♪」
明久に見せないように中身を見てにんまり笑う綾香。
「ちょっと返してよ！」
「や～だよ～ん☆♪」
明久は自分のクラスが書かれた紙を綾香から取り返そうと掴みかかるが、彼女は楽しそうに逃げ回る。
それが少し続いたところで……。
重いものが石に落とされたような重量感あふれる音がふたつ響く。
西村教諭の拳が二人の頭を痛打した音だ。
「まったくいい加減にせんか。とっとと自分の教室に行け」
呆れたような声を出す西村。その足下で頭を押さえてうずくまる二人。
そして、綾香が痛みのあまり取り落とした紙には……。

『吉井明久……Ｆクラス』
『夏目綾香……Ｆクラス』

ふたりの学園最低クラスでの生活が始まった。

だい☆いちもん♪（後書き）

いかがでしたか？
普段書いてる分量より短い感じですが、テンポ良く行きたいなと思っております♪

だい☆にもん？（前書き）

さて、『だい☆にもん？』更新となります♪
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

だい☆にもん？

「おー☆　でっかい教室だー♪」
「……うん。ばかデカい教室だね」
去年は足を踏み入れなかった三階。
そこで目の当たりにしたのは巨大な教室だ。
「おー☆　すっげーぞアッキー！　個人エアコンや冷蔵庫までついてる！」
「なんかもう高級ホテルだね……」
目をキラキラさせてる綾香に対し、明久はちょっと引いてる感じだ。
「あ！　優子だ☆　おーい♪　ゆーこー♪」
豪華な教室の廊下側の窓から中を覗いていた綾香は知り合いを見つけた喜びに、体をいっぱいに伸ばして両手を振る。
それに気づいた眼鏡にボブカットの少女は不思議そうな顔になり、ボーイッシュなショートヘアの緑髪の少女は面白そうな表情となる。
そして綾香の目当ての少女は、彼女を一瞥して、無視した。
「あっれー？　気づかないのかなー？」
目当ての少女の様子に綾香は首を傾げる。
「……なんか注目されてるね綾香」
「ん～？　別にいーじゃん？　はあ。じゃ、教室行こうか」
言うが早いか明久の手を取り歩き始める。
そんな二人を鋭く見つめる二対の視線に気づかずに。

三階、旧校舎部。明久と綾香は連れだってその古ぼけた……いやさ廃屋のような教室の前に立った。

「すっげー。きっとこの教室崩れるぞ？　アッキー☆」
先ほど同様、目を輝かせる綾香。対して明久は顔をひきつらせるばかりだ。
「ま、まあ中はマシかもしれないしね」
おのれに言い聞かせるようにつぶやく明久。
「なあなあアッキー☆　どんな奴がいるんだろうな♪」
言いながら綾香は明久を引っ張りながら戸を開けた。
「早く座れウジ虫野……ぼぐればぐらしゃっ？！」
開口一番罵倒を口にした赤い髪をツンツンに立てた少年の顔面に、きれいに揃えられた白い両足が突き刺さり、吹き飛ばされる。
綾香がショートダッシュからひねりを加えたドロップキックを決めたのだ。
ちなみにスカートを太股で挟んでめくれないようにしているが、瞬時にベストポジションを確保した小柄な少年がシャッターを切っていた。
が。
着地した綾香がにんまり笑う。
「……ま、まさか？！」
「そうだよ？　康太。あたしはちゃんとスパッツ履いてるから☆」
ぴらりとスカートをめくって見せる綾香に鼻血を噴出する小柄な少年。
「……くっ。スパッツを履いていながらもあたかも履いていないようにガードして見せるとは……不覚……」
そのまま力尽きる、康太と呼ばれた少年。
一方、明久は綾香のロケットキックを食らった赤毛の少年のところへ近づくと、足先で彼をつついた。
「おーい、雄二～？　生きてるか～？」
「ぐ……あ、明久か……いったい何が……」
頭を振りながら身を起こした、雄二と呼ばれる少年。
その顔面には、しっかりと綾香の上靴の底の模様が刻まれている。

「綾香の全力ロケットキックを食らったんだよ。あれ、地味にひねりまで加えてるから威力あるんだよね」
「……綾香？　アイツはＢクラスかＡクラスだろ？　なんでＦにいるんだ？」
頭がはっきりしてきた雄二は、クラスに思いもしない人間がいたことに驚く。
「あー、うん。綾香、途中退席したからね。点数が無いんだよ」
雄二の質問に顔をしかめながら答える明久。
「あー面白かった☆　あれ？　雄二じゃん。どったの」
向こうで康太をイジって遊んでいた綾香がやってきてそうのたまう。
「てめえに蹴り飛ばされたんだよ！　このエセ外人！」
「あー。さっきの雄二だったんだ。ウジ虫呼ばわりされたから反射的に蹴ったんだけど、雄二ならいっか☆」
花が咲くように笑う綾香。そのまま明久の腕をとって歩き出す。
「アッキー、こっちで一緒に座ろうぜ～☆」
周囲から明久に向けられる殺気と嫉妬の視線を気にもせずに、明久と腕を組むようにしながら教室の後ろの方へ引っ張っていく。
畳敷きにちゃぶ台という、本来教室としてあり得ない環境も気にしない綾香。
果たして彼女はこのおんぼろ教室で、どんな騒動を引き起こすのか？

だい☆にもん？（後書き）

いかがでしたか？
基本自由な綾香の活躍は、まだまだこれからですよ♪

だい☆さんもん！（前書き）

だい☆さんもん！　更新しました♪
よろしくお願いします♪

だい☆さんもん！

周りの目を気にすることなく空いてるちゃぶ台へ向かった綾香と明久。
「おー☆　ここにしよーぜー♪」
隅の空いてる席を発見した綾香が楽しそうにそちらへ向かう。そして苦笑い気味にその後を着いていく明久。
着席しながら手招きする綾香。
「アッキーは、あたしの後ろな☆」
言われて明久はうなずき、綾香の後ろの席に着く。
するとちょうど担任とおぼしき中年男性が教室に入ってきた。
未だダメージの抜けきらない雄二と康太に対して席に着くよう促すと、自己紹介を始めた。
「つー、まだ頭がくらくらするぜ……」
ぶつぶつ言いながら明久から一つ席を挟んだ向こうに座る雄二。その目は綾香をにらんでいるが、彼女は気にしない。
と、明久の眼前に金髪が広がった。綾香が頭を背中に向けてそらすように明久の方へ顔を向けたからだ。
「なあなあアッキー。なんで黒板に名前書くのやめたんだろうな？」
綾香に言われて前を見ると、福原慎と自己紹介した中年男性が黒板の方から生徒の方へ向き直ったところだった。
「あー、さっき見たんだが、チョークのクズしか無かったからな」
つまらなさそうに答える雄二。それを聞いて綾香は目を丸くした。
「すげーな！　……たはぁ～☆」
無理な姿勢で耐えていた彼女だったが、力尽きて明久のちゃぶ台に背中をつけた。
ちなみに先ほどから自己主張の激しい双子山が際立っていて、男子の視線がそこへ集束しており、康太がシャッターを切っていた。

「それでは、順番に自己紹介してもらいましょう」
福原教諭の声に、綾香はパッと身を起こした。
目をキラキラと輝かせて聞く体勢だ。
そして、ひとり立ち上がった。
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」
独特の言葉遣いに小柄な体。美少女と見間違うばかりの愛らしい容姿の少年、木下秀吉。
明久の去年のクラスメイトだ。
「おー☆　秀吉じゃん♪　相変わらずかわいーよなー」
そう綾香が口にすると、秀吉が綾香の視線に気づき、一瞬、複雑そうな表情になったがすぐに座ってしまった。
そして再開される自己紹介。
「……土屋康太」
康太が立ち上がって名乗ると、綾香が“あの”悪魔の笑みを浮かべた。
康太が座ろうとしたところで綾香がおっきな声を出す。
「いよっ♪　ムッツリスケベ☆」
「……そんな事実はない（ブンブンブン）」
顔と手を左右に振って否定する康太。
クラス中に注目されながら否定を続ける彼を見て、綾香は大笑いする。
その騒ぎが終息し、再開された自己紹介。
「島田美波です。海外育ちで、日本語の会話は出来るけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。ドイツで育ったので。趣味は……」
そして今自己紹介をしている赤茶色の髪をポニーテールにした少女を見て、またもや綾香が笑う。
「まぁた美波と同じクラスじゃんアッキー♪　嬉しいんじゃない？」
「そりゃ友達だしね……。けど彼女。段々と技の切れ味が上がってきてるから、避けるの大変なんだよね……」

すこしげんなりしながら答える明久。
「はろはろ～♪」
手を振る美波に、綾香も笑いながら手を振り返していた。
「やっは～☆　美波～♪」
さらに自己紹介は続いて、綾香が立ち上がった。
「夏目綾香だよ☆　よろしくね♪　好きなものはプリン♪　嫌いなものはしつこい人。身長は１６５。体重はないしょ☆　スリーサイズは上からバスト９３、ウエスト５９、ヒップ９５だよ☆　ちなみに恋愛とかメンドいから彼氏の募集はしてないよん♪」
その言葉に、Ｆクラス男子の大半が絶望した。

だい☆さんもん！（後書き）

だい☆さんもん！　いかがでしたか？
綾香の恋愛メンドい発言に、全Ｆクラス男子が泣いた！
次回は綾香が何を始めるんでしょうか？

だい☆よんもん♪♪

綾香がFクラス男子を絶望のずんどこに追いやったのを後目に、明久が立ち上がる。
「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい……」

シンッ……。

誰も明久の自己紹介なぞ聞いていなかった。
「ノ……ノーリアクションって、地味にダメージデカいよね……」
さめざめと涙を流しながら着席する明久。
すると綾香が楽しそうに振り向いて、明久のちゃぶ台に、笑顔で頬杖を着く。
「気にすんな♪　ダーリン☆」
「……やっぱ痛々しいからその呼び方やめて……」
明久の涙が加速するのを見て、綾香はさらに楽しげになった。そして膨らむ殺意と嫉妬。「……気のせいか僕へのプレッシャーが凄いことになってる気がするんですけど……っ？！」
「？　そうかぁ？」
あまりの圧力に滝のような汗を流す明久。それを受けて綾香が周りを見回すと、プレッシャーが霧散する。
「なんともないじゃんよ☆」
言いながら明久に笑顔を向ける綾香。
と、そのとき。
教室の戸が開いて、一人の少女が息を切らせながら入ってきた。

「あの、遅れて、すいません……」
『え？』
その少女の姿に、教室中が呆気にとられた。
そして綾香も驚いた顔で立ち上がった。
「み、瑞希？！」
「え？　あ、綾香ちゃんですかっ？！　な、なんで綾香ちゃんがっ？！」
「それはこっちの台詞だよ～♪」
そう言いながら立ち上がると、瑞希の方へ行って彼女を抱きしめる綾香。
「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって……。それで綾香ちゃんは？」
綾香に抱きつかれながらふわふわのピンクブロンドの少女、姫路瑞希は苦笑い気味に答えてから綾香に訊ねる。
綾香は瑞希の言葉を聞いて、大変だったねとつぶやくように言ってから、相好を崩した。
「あたしは、祖父ちゃんが倒れたって連絡が来てさ、途中退席したんだよ。まあ、実は祖父ちゃんのイタズラだったんだけどね」
その後、祖母ちゃんやパパ達に怒られてたよ～などと笑いながら話す綾香。
「けど、今年はアッキーも瑞希も同じクラスだなんて、あたし嬉しいよ～♪」
「え？　明久君も居るんですか？」
綾香の言葉に、瑞希が顔をほころばせた。
あっちだよ。と、綾香が指さした方を見て花が咲き乱れるかと思うほどの笑顔を浮かべる瑞希。
これによって明久への殺意と嫉妬はうなぎ登りに上がっていく。
そんな空気など読まぬとばかりに中年男性の弱々しい声が通った。
「え～、嬉しいのはわかりましたが、席について下さい夏目さん。それから姫路さんは自己紹介を」

言われて綾香は目をぱちくりさせる。
それから腰を折って頭を下げた。
「あーゴメンね？　福ちゃん。席戻るから怒んないでね？」

そう言ってから席へと戻っていく綾香。
そして、残った瑞希が軽く会釈した。
「姫路瑞希です。一年間、よろしくお願いしますね？」
そう言って顔を上げると、少し頬を紅潮させながら小走りで教室の後ろの方へ向かった。
「ふう、緊張しました～」
ほう。と息をついて、明久と雄二の間の席へと着席する瑞希。
それを待ちかまえていたように綾香が瑞希の方へ体を向けた。
「けど、瑞希と同じクラスになるのって小学校以来だよね～」
そう綾香が話すと、瑞希も笑顔で応じる。
「そうですね。中学は違うところでしたし」
「去年なんか、アッキーともクラス違っちゃったしさ。小中で違うクラスになったこと無かったのに……」
そう言ってちょっとだけしんなりとなる綾香。
するとその時のことを思い出したのか、明久が苦笑いを浮かべた。
「あの後ひどかったっけ。『何で違うクラスなんだー！』って怒鳴られたんだよ？　僕のせいじゃないのに」
やれやれと肩をすくめる明久に、綾香はバツが悪そうになる。
「う。い、いいじゃんさーその事は！」
「クスクス、私の所にも相談しにきたくらいですしね」
「み、瑞希っ？！　バラすなんて裏切り者ぉっ！！」
などと騒ぎになり始める。
すると当然。
「はい、そこの人達。静かにして下さい」
と、教卓を軽くたたきながら注意する福原教諭。
それに対して明久達が謝ろうとした瞬間。

パキィ、ガラガラガラ……。

そんな音を立てて、教卓が廃材の山になった。

だい☆ごもんかな？♪

福原教諭が廃材となった教卓の換えを取りに行っている間、明久は雄二を誘って廊下に出ていた。
「戦争だと？」
「そう、試験召喚戦争」
訝しげに聞き返す雄二に対して、明久はしっかりうなずいてみせる。
「……おい明久、てめえなにを企んでやがる？」
「別に企んでなんていないよ。あんまりにも教室が酷いからね」
探るような雄二に対して、軽く肩をすくめる明久。
その様子を見ていた雄二の目が細く鋭くなる。
「……姫路と夏目だな？」
「！？」
雄二の指摘に、体が震える明久。
「……やっぱり、わかるかな？」
「カマかけただけだっての」
「うぐ」
「まあ、いいだろ。Ａクラスとの勝負に勝つ策もなんとかなりそうだしな。と、戻ってきたみたいだ。中へ入るぞ」
雄二に言われて明久はうなずきながら教室に入っていった。
福原教諭が戻ってきてから再開される自己紹介ではあったが、淡々と進むそれに飽きた綾香は、明久のちゃぶ台に寝そべり、組んだ両手に顎を乗せながらあくびをかみ殺していた。
綾香の頭は明久の顔の下あたりにあり、彼のちゃぶ台は美しい金糸のテーブルクロスが敷かれているようだった。
「つまんねーなー？　アッキー。そっから紐無しバンジーしてきなよ～♪　笑ったげるから☆」

頭を横に倒し、横目で明久を見上げながら小悪魔の笑みを浮かべる綾香。
その突拍子もない提案に、明久はため息をつく。
「笑ったげるから☆　じゃないでしょ？　ここは三階だからね？　紐無しバンジーなんてしたら怪我しちゃうからね？」
「ちぇー、つまんなーい」
唇をとんがらかせ、頬を膨らませながらぶーたれる綾香。白い足がパタパタと動き、赤いスカートと黒いスパッツに包まれた丸いヒップが揺れる。
この綾香の体勢に、明久への殺意と嫉妬を向けたいFクラス男子であったが、そんなことより、無防備な綾香をガン見したいという欲望がせめぎ合っているようだった。
そして血涙を流しているのは綾香と同じ列に座る男子諸君。
真後ろを向かなければその絶景を見ることができない為、激しい葛藤に身を焦がしていた。
「さて、グダグダではありますが、自己紹介最後の一人は君ですね？　坂本君」
誰も聞いていない自己紹介はいつの間にやら終盤だったようだ。
福原教諭に言われた雄二が、うーっす。と、答えながら立ち上がり、教壇へと向かう。
その様子になにか感じるものでもあったのか、綾香も身を起こして座り直した。
雄二が教壇まで来ると、福原教諭が声をかけながら教卓を譲った。
「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたね」
「はい」
返事をしながら教卓に手を着きながら立った。
「俺がFクラスの代表、坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」
そう言って少し間を置く。
自然、クラス中の視線と意識が雄二に集中した。

それを確認した雄二はおもむろに口を開いた。
「さて、ここでひとつ、みなに問いただしたいことがある」
そう言って言葉を切り、教室を見回す。
その視線の先を追ってしまう一同。

古ぼけてガタガタなちゃぶ台。

つぎはぎだらけで、綿の代わりにホコリが詰まっていそうな座布団。

隙間だらけの壁と、割れたガラスしかはまっていない窓。

それらを見てから、皆に向き直る雄二。
「……Aクラスは、システムデスクにリクライニングシートらしいが……不満はないか？」
『大アリじゃああぁぁっっ！！』
クラスの男子が一斉に唱和した。
そしてそこかしこから、不平不満の声が、止めどなくあふれでる。
「そうだろう？　俺も代表として問題だと思っている。そこでだ」
雄二の雰囲気が、カミソリのごとく鋭くなった。
「我々Fクラスは、Aクラスに対し、試験召喚戦争を挑もうと思う」
引かれた引き金。
そして、その言葉に、綾香の目が☆になった。

だい☆ろっくも～ん♪

『勝てるわけがない！』

雄二の引いた引き金に対する第一声。そしてこれこそが、クラスの総意を代弁していた。

試験召喚戦争とは、文月学園独自のシステム、“試験召喚システム”を利用し、テストの点数に応じた強さの召喚獣を召喚し戦わせて行う疑似戦争だ。

これに勝てば、相手の教室設備を奪うことが出来るのだ。

しかし、文月学園は、第二学年からは成績順にクラス分けがなされる。最底辺のFクラスと最高位のAクラスでは、三倍以上の点差があり、それがそのままクラスの戦力差につながるのだ。

いくら最底辺のクラスとはいえ、その位のこともわからないような人間はおらず、さらにあちらこちらから開戦に対する否定的な意見が飛び出し始めた。

その中にあってなお、明久は真剣な眼差しで、綾香は楽しげな顔で、雄二を見つめていた。

そして、クラス中が騒ぐ中、それを貫く声が響いた。

『いや、勝てる！！　俺が勝たせてみせる』

力強い言葉。

それを発したのは雄二だ。

呑まれるように、クラスが静かになる。

「だが、そうは言ってもにわかには信じられないだろう。そこで、このクラスに存在する勝てる要素を説明しようと思う」

雄二の言葉に、クラス中が顔を見合わせ、ざわつく。

しかし、彼は意にも介さずに口を開いた。

「まずは康太。姫路のスカートを覗いていないで前に来い」

その雄二の言葉に、瑞希が、え？　となり、畳に顔をつけていた康太があわてて起きあがる。

「……！？（ブンブンブン）」
「ひゃわっ？！」
赤くなり、太股を閉めながらスカートを押さえる瑞希。
その様子に綾香は楽しそうに笑う。
「あっはっはっは☆　康太のムッツリスケベ～♪」
「……そんな事実はない」
はっきり否定する康太。その視線が、綾香の視線と絡み合う……ことも無く、彼女のわがままな双子山に注がれていく。
ふいに、綾香が口を開いた。
「……何色だった？」
「……水色」
「やっぱ見てんじゃん」
「……巧妙な誘導尋問」
「ひどいです綾香ちゃん！　何で私のパンツの色を公開しちゃうんですか？！」
パンツの色を暴露されて目をぐるぐるにしながら憤る瑞希。
「ぱんつくらい良いじゃん☆　特に何も減らないし」
「減ります！　何かこう、大切なものが減っちゃうんです！」
バラしたのは綾香ではないが、瑞希は混乱していて気づかない。
一方の綾香も気にした風でもなく瑞希に応じている。
「あー。話つづけたいんだが……」
不意に雄二から声をかけられ、瑞希はハッとなり、顔の紅の面積と色合いを増加させながらぺこぺこ謝った。
「……ま、いい。少し脱線したがこいつは土屋康太。まあ、この名前ではあまり知られてないだろうが、こいつの正体はあの“有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）”だ」
雄二のその紹介に、教室が騒然となる。集まる視線は畏怖と畏敬。
「よ☆　ムッツリスケベ♪」
さらには綾香が合いの手まで入れて教室は大盛り上がりだ。
しかし当の康太はそれどころではない。

「……！！（ブンブン）」
こんな状況にあってなお否定する康太。その姿は哀れを誘う。
「はあ、煽るな夏目。次は姫路。今更説明する必要はないだろうが、その力はみんなも知っての通りだ」
「わ、私ですかっ？」
「うちの主戦力だ。期待させて貰う」
言われて瑞希は神妙な顔つきで、ハイ。と返事をする。
「それから島田美波」
「ウチ？」
突然話を振られて驚く美波。
「こいつは自己紹介にあったように帰国子女で、数学ならBクラスレベルだ」
その雄二の言葉に、どよめきが生まれる。
「ちょ、ちょっと坂本！　ウチはそんな戦力には……」
美波は持ち上げられて、若干焦り気味に否定しようとするものの。
「木下秀吉だって居る」
雄二はスルー。
「ワシかの？」
名前を呼ばれると思っていなかった秀吉は、きょとんとなる。
だが、教室は秀吉の名前が挙がったことにさらなる盛り上がりを見せる。
「そして夏目綾香」
「いぇーっす☆」
続けて挙がった自分の名前に、綾香は立ち上がりながら応え、スキップするように前へ出ると、そのまま教卓に飛び乗った。
「お、おい！？」
これには雄二も驚いてやめさせようとするが、綾香は気にしない。
「綾香だよ～☆　みんな、勝つぞーっ！♪」
そう大きな声で宣言し、大きく両手を振り回しながら軽く飛び跳ねる。

するとFクラスの士気は最高潮を迎えた。
『ウオオォォーーッッ！！』
そんな雄叫びが響き、教室が揺れる。
そして綾香の足が、再び教卓に着いた瞬間。

バキバキィッ！！

「へ？」
「な？　ぐおっ？！」
崩壊する教卓に雄二を巻き込みながら教壇へと落ちる綾香。
埃が煙のように舞い上がり、二人の姿を覆い隠す。
「綾香っ！？」
「綾香ちゃんっ！？」
明久や瑞希をはじめとしたクラスメイトたちが、あわてて教壇に集まった。
次第に晴れたそこには、元教卓の廃材の山。そして、クラス代表の少年の顔の上にぺたんと女の子座りした綾香の姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7557x/

バカとテストと召喚獣 〜蒼い瞳の従姉〜

2011年10月26日08時04分発行